

葉彭年は、叔母の指輪と細身の銀のブレスレットを箱から取り出すと、綿でくるんで古びた封筒につっこみ、細心の注意を払ってうちポケットに収めた。上着の上からもう一度撫で回し、姿見のところへいつて映してみたが、服は特に膨らんではいない。彼は、ネクタイを直す、突風のよう階段へ駆け下りた。客間の前は自転車を押しながら通った。顔をあげて一声「晩ご飯はいらないから！」と叫ぶと、返事も待たずにそのまま通り過ぎた。門を出ると自転車がまたがり、まるで逃げるかのように大任務を果たすべく出発したのである。

角を二つ曲がってから、彭年は電灯を持ってきていないことに気がついた。時刻はまだ早かったが、もう一度取りに帰るのはどうも気が進まない。陳家ならすぐそこだ。よし、自転車は預けてしまおう、と彼は思った。晩には人力車を雇って帰ればよい。そうすれば暗闇の中を自転車をひいて行く面倒も省けるし、それに、今日はまた令儀に会ってもいい。二、三分でもいいから今度のことは彼女に話しておかなくては。

令儀はちょうど彼を待っているところだった。淡いブルーの服をまとった彼女は、いつにもまして青白く瘦せて見えた。令儀は服や靴下にはこだわり、上品で高価なものを好むのに、決して化粧をしない。彭年にはこれがどうしてもわからない。恥ずかしながらスノップを自認する彭年は、令儀にそんなに地味でいて欲しくなかった。宴会や婚礼の祝いなどの際、彼女がうっすらと化粧を施し、細い眉と瑞々しい眼を引き立たせると、実にきりっとしてしかも艶やかなのである。

やわらかな色合いの衣装を着ると、いつもの骨張った感じとはうってかわって、ほっそりとたおやかな線が浮かび出てくるのだ。もともと、彼女の美しさとは、普段はすり減らぬようにしまっておき、必要なときだけ取り出してくるものなのかもしれないが、令儀はこのとき、青い地に白い線の入った本を小脇に抱え、階段の踏み石の上で笑っていた。顔中汗だらけで何をそんなに忙しがっていらっしやるの、と彼女は彭年に問いかけてきた。

上まで上がる暇はなかった。彭年は階下の応接間で手短に済ますことにした。彼は、叔母が賭で負けて宝石の処分を自分に依頼したことを令儀に話したくてうずうずしていたのだ。

彭年は、親戚や友人のためにあれこれ奔走するのが常だった。彼は勉強が嫌い、抽象的な問題は苦手だが、実務面では天才的である。そのうえ、生まれつき情が厚く、他人のために力を尽くし、いいように使われても気にしなかった。最近では、いくどとなく闇取引に手を出し、知り合いも増えたので、ますます大胆になっている。葉太太（本名は葉太太、夫は葉太太に嫁ぐ）はこういう息子が心配でたまらなかった。体格は父親に勝るほどののに、子どものように純情なのである。顔立ちも、すっきり整って目元も涼しく、馬鹿には見えぬが、どうしても学業に励もうとしない。近頃は、取引とかで、どこかの馬の骨ともしれぬ人間と知り合って、ダンスホールや賭博場にしばしば出入りしているようだ。悪い女にでも引っかけ道に誤らないとも限らない。母親は、彭年が、卒業まで待たずに、早く令儀と結婚してほしいと願っていた。しかし、彭年のほうは、令儀と仲はよくても、結婚のことなどまるで考えていなかった。二人は親の代からのつき合いで、いつとはなしに、夫婦になるのが当たり前となっている。彭年は、令儀が賢く上品で、自分などとても及ばぬと崇拝しきっていた。将来お金を儲けて彼女に不自由ない暮らしをさせ、これまで通り彼女

が詩や歌を作り、絵をかき、ピアノが弾けるようにしてあげられればよい。そして二人の子どもは自分のような俗物ではなく、令儀のように賢く学問好きであってほしいと望んでいた——ともかく令儀に嫌われさえない方がいいのだ。おかしい彭年！彼は令儀の愛情にまったく気がつかず、彼女を美しい淑やかな妹（彼女は彭年より年下だった）のように考えているのだ。しょっちゅう彼女に会って、自分のしたことを一部始終話せば、それでもう十分。結婚などまだ先のことなのだ。

叔母の今回のこの一件は、口外無用だったが、令儀はもちろん例外である。彭年は、すでに銭と名乗る人物にその気のあること、間にたった友人は朱（し）といい、彼はこれから、朱のうちに（お）うとしているところで、銭という人物がまず現物を見たいといって、今晚彼ら二人を夕食に招待したのだということを令儀に話した。

「そういう人たちといつお知り合いになったの？」令儀の言葉には「ダンスホールのお仲間？」という含みがある。

彭年は顔を赤くして言った。「コーヒー飲みについて紹介されたんだ。」

令儀は彼が現物を持って晩に出歩くことを心配したが、彭年は、もともと今日の昼、朱の家で例の銭という人物に会う約束だったのを、授業があったし、他人に預けるのも心配で晩に変えたのだと答えた。

令儀は手で本をくるくるとまわめながら、何気ないふりをして笑った。「あんまり飲まないでね、誘拐されないようお気をつけて！」

「他に山ほど金持ちがいるのに、わざわざぼくなんかを誘拐するもんかい！」

彭年は大声で笑い飛ばした。

またもや酒のことをとがめだてしてまずかったと後悔し——彭年はこれを言われるのを嫌っていたのだ——令儀は、それ以上この話題には触れずにしまった。彼は当たり障りのない話でお茶を濁すと、急いで出掛けることにした。彼女に心配させまいと、彼は笑いながら言った。朱という友人は不良じゃない。家もあるし家族もいる。絶対信用できるから。

とはいっても彭年は、今回初めて朱家を訪れるのであった。応対に出たのは厚化粧を施し、でっぴりとした中年婦人だった。彼女はねっちりとした糊のような声で、出迎えがてら「彭年さんじゃございませんか？　たくの主人からさっき電話があったところで、なんでも急用で遅れるから、ちょっとお待ちいただくようにとのことでしたわ。」と、しきりに詫言をいれながら、彭年を客間に招き入れた。

彼らの住まいはアパートだったが、この客間はまばゆいほどにきらめいていた。部屋全体がガラスをはめこんだメッキばりの家具でうめ尽くされていたのだ。こんな部屋に入れば、だれもが自分のさえない肉体に恥じ入ることだろう。水晶の心臓にガラスの肉体を持った者のみがキラキラ輝くこの部屋の住民にふさわしいのだ。特に、このご婦人ときては、周囲の光を浴びて、白粉の下の原型をすっかり曝け出してしまっている。皺は言うまでもなく、細い弧を描いた眉の下には二本の太い青々とした剃りあと、その上の抜き残した眉毛二、三本まではっきりと見えていた。彭年は視線を上げるのもきまり悪く、じっと目を伏せていた。うまい具合にこのご婦人はまったく気づいた様子もなく、ダイヤの指輪をきらめかせていた。二言三言お愛想を言いながら、かしこまって手ずからお茶と煙草をすすめると、いそいそと他の用事を足しにでていった。彭年は堅

い椅子に腰掛け、わきに積んであったグラビア誌をばらばらめくってみた。壁には電気仕掛けの時計、その長針がひととびすると五分である。五分、また五分と時が経っていった。

突然足音が聞こえたかと思うと、濃い紫の服をまとった女性がさーっと風のように舞いこんできた。続いて香水の香りがあたり一面に漂う。彭年は顔を上げると、この女性の側面だけが見えた。細身ながら肉付きのよいからだ、頭全体を被う巻毛は、ひとつひとつ巧みにゆるいカールに仕上げられている。耳には三重の細い金の大きなイヤリングを下げ、腕にも細い金のブレスレットをつけている。こんななりをして、なんという馬鹿女か、でもなんて素敵に体つきなんだろう、彭年は密かに思った。

ドアの外から甘ったるい声で「梅！」と軽く一声かかった。紫の服をきた女性は素早く向きを変え、彭年は思わず呆然とした。目の前に立っているのはまだ年端もいかぬ艶やかな少女だったのである。彼女は強烈な光線のもとで、まばゆいばかりに輝いていた。彭年に気がつくとは、と驚き、素早く一瞥したかと思うまもなく客間からさっと出ていき、続けて扉の外で起こった甘ったるい笑い声は次のドアのむこうへと消えていった。

彭年はじつと扉の外を見つめた、たった今、目にしたばかりの印象をなんとかつなぎ止めておこうとした。だが、すでにざるに水を盛ったようにみなこぼれ落ちてしまっていた。ぼんやり記憶に残っていたのは、彼女の首筋から腰にかけてのなやかな姿態、まなじりや眉先の艶やかさ、あだっばく人を見やる瞳の輝きばかり。それと、顎にくっきり浮かんでいた笑くぼがその顔をいかにも子どもっぽく愛くるしく見せていたことだった。彭年は美しい少女を幾人も見てきた。彼女たちの装いはこの少女よりも洗練されていた。けれどもこの少女の姿はなぜか彼の心にびたり

とはまりこんでしまったのだ。関係ないさ。彭年は彼女のことなど気に留めるつもりなどなかったが、雑誌をあれこれ乱暴にめくっていても、どうも苛ついて落ち着かないのであった。

部屋の外で電話がジージーと鳴った。例の婦人が受話器を取り、葉さん、主人から電話ですと取りついで。受話器の前に立ったとき、彭年は、脇のドアの隙間から誰かに見られているのに気がついた。どうも気詰まりである。話をするにもぎこちなくなる。ただ「はい、はい、はい」を連発するばかり。朱氏は、いま抜けられないのだが、例のものは持ってきたかと尋ねてきた。持ってきたかい？ よろしい。僕は直接料理屋に行くつもりだから、君もそちらに向かいたまえ。彭年は受話器を置くと、半開きのドアの後で例の紫の服をきた女性が、遠慮会釈なくじつと彼を見つめているところだった。

お前は何という俗物か、道中彭年は自分をなじり続けた。でもどうして上品ぶらなきやならないんだ！ 令儀がお上品すぎるんだ。まるで彼女が好む苦い緑茶そっくりだ。彭年は、これまで緑茶の風味がわからぬと深く認めたことはなかったが、本音を言えばコーヒーの、あの濃厚で刺激のある香りが好きだったのだ。

料亭に入ったところで、彼は、耳が横に大きく張り出し、出っ歯でノッポで、真新しい背広を着た男に出くわした。男は、彭年を見るや、長年ご無沙汰していた親友に出会ったかのように、片手で彼の手を握りしめ、片手で肩をたたいて「よう、葉君、食事かね？」と笑いかけてきた。彭年はぼかんとしてしまった。顔見知りのような気はするもののどうにも姓名が浮かんでこないのだ。あわててあいまいな笑みを浮かべてうなずいた。その男は彭年をしっかりと捕まえて放さず「こっちは下の大テーブルの方なんだ。あとで話にきてくれ給え。」と言い、どの部屋かと聞

いてきた。彭年は待ち合わせなんだといって顔を上げると、目の前の黒い板に朱棟七号室と書いてあるのが目に入った。そこでボーイに、朱さんはおいでかと尋ねると、「朱さんですか？ とくにおいでです。」とボーイは慰めな物腰で彼を二階へと案内していった。

七号室では、殿様ガエルのような人物が、上から下までライトブルーの洋服ではちきれんばかりに身を包み、腹を突き出して煙草を吸っていた。彭年に気づくと、ねじをまかれたぜんまい仕掛けの人形のように、びよこんと飛び上がった。煙草は床に投げ捨てて足で踏みつけ、ガーッと唾を吐くと、彼を頭の先から爪先までじろじろ見渡し、「葉さんですか？ 私めは錢と申します。」とにやりとして言った。彭年は、急いであいさつを返した。相手の指には巨大な透明の緑の翡翠の指輪がはまり、胸には小指ほどもある太さの純金の鎖が下がっているのが目に入った。相手はざらざらした笑いを浮かべながら、ありとあらんかぎりのお世辞の言葉を浴びせてきた。彭年は勉強好きで、仕事のほうもやり手だとか、おぼっちゃまながら、たいそう賢くていらっしゃるか。そして大声でボーイに熱い茶と煙草を言いつけ、同時に朱さんがもうお出かけになったかどうか電話で問い合わせるようにと言った。彭年が急いで先ほどの電話のことを告げる。錢氏は素早くノートを取り出し二種類の番号を捜しだすと、ボーイに電話をかけにやらせた。その一方ではまた、彭年に向かって、あなた方大学生の貴重な時間を無駄にしてしまつて実に申し訳ないわびるのであった。

まもなくボーイがやってきて、どちらにもこの方はいらっしゃらないと告げた。彭年は、恐らくこちらに向かっているのだらうと思った。錢氏も、きつともう姿をみせる頃だろうから先に料理を頼んでおいてもいいだらうと言う。幸いなことに二人の間ではにぎやかに会話が進んだ。錢

氏は商業界のニュースやら巷の噂話やらを腹いっぱい詰めていた。それに彭年へのお世辞をまぜこめ、彼を、未来の社長、工場長になる人、銀行総裁と呼ぶ。留学はいつにするのか、某「大ボス」は最近どうだなどと、まるで彭年がすでに「大ボス」の一人であるかのような口調で聞いている。彭年は、少々うんざりしたもの、向こうは好意で言ってくれているのだし、それに、いちいち恐縮するのも面倒だったので、この大仰なお世辞をそっくり受けてしまった。

料理が運ばれてきたが、朱氏はまだ現れない。二人がどうしようかとためらっていると、ドアからにゅつと顔が突き出た。朱氏ではなく、先ほどのノッポである。

「よう！ 爺さんかい！」 錢氏もこの男と知り合ひだった。

「おそろいだね！」 大口を開けて笑う爺氏の口元で、歯がむき出しになって輝く。彭年は急いでもう一度挨拶をした。爺氏は湯気の立ち昇る料理をみると、すかさず言った。「さあさあ、始めた、始めた。おふたりのおじやまはしないから。」

「いやいや、まだ人が来るんで。」 彭年と錢氏は口を揃えて言い、朱さんがまもなくやってくる

ところだから、今少し待っているのだと話した。

「朱棟臣かい？」 爺氏ははっと大笑いした。「彼を待つのかい？ ご兩人、やはり先に食べ始めたほうがいいですな！」 彼は、錢氏の耳元で二、三言ささやくと、彭年の方を振り返って人差し指を立て、片目を軽くつぶってみせながら言った。「ごめんなさいよ、悪の道に引き込まれけにはいきませんからな？」 こう言われた彭年はどうにもきまりが悪い。まるで大切に育てられた良家のお嬢さんが粗野な言葉を聞いたかのようにさあっと顔を赤らめてしまった。錢氏の方は真剣そのもので、カエルのような目はもう飛びださんばかりだった。そして、どうしようもない

というように首を左右にふると、ほーっと大きく溜め息をつく。そしてのっばに尋ねた。「見たのかい？」

「もちろんさ！ たった今そこから来たんだからね。」

銭氏は両の肩を寄せ、いかにもがっかりした様子だったが、自ら元気づけるかのように「まあいいさ」とつぶやいた。箸をとりあげると、彭年に言った。「さあ、熱いうちにいただきますしゅうか。」そして、料理をとりわけ、スープを付け、酌をし、お茶を控えさせ……葉さんさあどうぞ、とあれこれもてなすのだった。「今日、葉さんとお会いできただけでまったくうれしい次第。ゆっくりやるのがモットーでしてな。」彼は活気を取り戻していた。爺氏も、仲間入りして言うには、うちの方にはいい酒があり、こちらは料理が格別ときている。今日は皆でおおいに飲みましょうや。食卓にはもともと三人分の食器が並べられており、爺氏も銭氏のすすめを断りきれず、席について代理をつとめることになったのだった。

彭年は黄酒（うち米、もち米、もち葉を原）なら五、六合飲んでも酔わない。ところが、今晩は四合と飲まないうちに、まるで頭の中が酒で溢れかえったようで、早くも重くて顔をあげていられなくなった。ぼんやりとして、右のこめかみがびりびり痛んだ。他の二人は一杯また一杯と酌をしにくる。背広のそでをまくりあげた二人は、大声で拳（拳、足した数字〇十までを喝え、数を言い当てた方が勝ちとなる。敗者は罰金）を打っている。彭年はゆらゆら熱い湯気の中をふわふわ漂っているようで、繰り返しがる喚声がまるで波音のように聞こえた。一波ごとに彼はますます遠くへ押しやられていく。霧の遙か彼方では、銭氏の二つのまぶたと鼻先が電灯の下でかか光り、爺氏のずらりと並んだ歯がきらきら光っていた。彭年は、首を椅子の背にだらしなくもたれかけさせながら、二人の大

の吠えるような騒ぎや奇怪な笑い声を聞いていた。本当に俺は酔っぱらったのか？ 彼は両目を閉じた。おぼろげながら二人に脇を抱きかえられて階段を下り、車に乗せられ、またどこか別のところでお茶を飲ませられたのはおぼえていたが、その後のことはまったくわからなくなってしまう。

彭年は目を覚ますと、自分ががらんとした部屋の床に横たわっているのに気づいた。日の光が天窓から差しこみ、その一筋の光の柱のなかで埃がゆっくりと舞っていた。部屋のなかは一応掃除されていたが、がらんとした家具はなにもなく、藁を詰めた敷布団と掛け布団が一枚ずつあるばかり。掛布団は、赤い水玉模様をついた機械織りの綿の生地に白い布団カバーがかり、割合に清潔である。傍らには大きな魔法瓶、そして、新聞紙の上にパンがひとつ置いてあった。彭年ははっと我に返った。あわてて起き上がり、ポケットの指輪とプレスレットを探したが、もちろんあるはずがない。古い腕時計は無事で、四時半を指したまま止まっていた。皮の札入れはなくなっており、革靴も脱がされていた。

扉と反対側の暗がり、鍵のかかかっていない両開きの窓があった。彭年はまず近寄って窓を押した。一メートルほど先を高い壁が遮っている。わきの壁と共に口の狭い深井戸をつくっており、六、七階建てのビルほどの深さがあった。試しに頭を突き出し下に向かって一声叫んでみる。その声は下からはね返り、ゴォーと響きわたった。振り向いて両開きの扉の方を眺めてみた。開くわけがないとわかっていても、やはり試さずにはいられない。錠がかかっていただけでなくドアの把手も錆だらけで、何十年の間、誰も触っていないかのようにだ。扉の隙間から覗いてみると、外は明るく、屑鉄がうずたかく積み上げられているのがちらりと見える。なにかエ

レベーターの鉄柵の扉のようなものがあり、その扉の前には錆付き埃にまみれた鉄棒が山ほど積まれていた。明らかにこの鉄の柵の扉は、長い間使われていないのだ。彭年は薬布団のところに戻ってきて腰掛けると、靴下の裏の埃を叩きながら思わず笑いだしてしまった。なんておかしいことなんだ。いったいどういうことやら。笑い声はがらんとした部屋に響くや、たちまちあたりの静けさに吸いこまれた。突然、彭年は恐ろしくなった。

昼間なのにあたりは冷え冷えとしている。例の一筋の光のなかで悠然と舞う細かい埃だけが、親しげにお相手をしてきているかのようである。彭年は光を見ていたが、いったい昼前なのか昼すぎなのか見当もつかない。飢えも感じなかった。魔法瓶の水は熱くもなく冷たくもない。彼は魔法瓶を抱え二口三口飲んだ。壁にもたれ、両手で膝を抱えとっくりと考えてみた。指輪一個とブレスレット一つに、人を幽閉する手間をかけるほどの価値があるのだろうか？ それとも何か恨みがあったのか？ まさか自分を誘拐するほど父親が金持ちだというわけではあるまい？すでに結婚している兄と姉の他に、まだ弟妹が五人いるんだ。自分を誘拐してどうなるっていうんだ。

しばらく考えているうちに、だんだんと落ち着き、まだめまいがするのに気づいた。また水を飲んだ。「やつらがどうだって言うんだ！ どう見たって殺されることはないだろう。牢に入っただけに悶々としていようより、寝たほうがましさ。」彭年はもともと寝つきがよい。この時はやっとの思いで目を開けていたのである。彼はどさりと身を横たえ、目を閉じるとたちまち眠りこんでしまった。

彭年は、奇々怪々な夢を山ほどみていた。と突然、ある考えが夢の中から意識のなかに入りこ

み、鋭利なナイフさながらすばと彼の夢を断ち切ったのだ。「僕は窓から入ったのでもないし、ドアから入ったんでもないというのなら、壁の中を抜けてきたとでもいうのか？」こんなふうに考えているうちに、彭年は目が醒めた。とすぐさま人の気配を感じた。

部屋は真っ暗で、黒く染まった静けさがひしひしと彼のうえにのしかかっていた。心臓の鼓動だけがはつきり聞こえる。彭年は息を殺しじっと耳をそばだてた。何の息遣いも聞こえない。暗やみは生きものと化し、暗闇に現れた目が彼をじっと見つめている。こんな恐ろしい思いをしたのは初めてだった。彭年は、身動き一つままならない。ただただ両手で掛け布団をひつつかみ、目をぎょろつかせるばかりだった。

長い時が経った。「自分で怖がってたのかな？」彭年は壁づたいにそろそろと身を起すすと、勇気を奮い起こし思いきり咳音をたててみた。すると暗がりからコホンと軽い咳が返ってきた。彭年はぱっと立ち上がり挑むようにもう一度ゴホンとやった。くすっという笑いが起こる。女の声だ。「誰だ！」彭年は大声で怒鳴った。

「まあ、こわいこと！」からかうような柔らかな声が返ってきた。

「誰だ！」

「あなたを助けにきたのよ。」

これではまるで冗談じゃないか！ 彭年は冷ややかに笑って言った。「それはどうも。ここも結構気持ちがいいですよ。」

足音が近づき、暗やみから芳香が漂ってきた。一本の手が手探りをして彭年の肩に当たった。相手は両手で彼の腕を抱えこむと、「本当に助けにきたのよ。」と小声でささやいた。

彭年はこの香りに覚えがあった。手を伸ばして相手の腕をさぐってみると、むきだしのままで、プレスレットひとつつけていない。女はすぐさま彭年の手を押さえ、「動かないで。」と小声で言う。唇を彼の耳もとまで近づけてささやいた。「気をつけて、他に人がいるのよ！」彭年は、てっきり二人が逃げるのを悟られぬためだとばかり思っていたために、気がついたときには、女に両腕をきつく縛られてしまっていた。もがこうとしたとき、「他に人がいる」という女の言葉が頭をよぎった。実は脅しだったのだ。まあいいや、されるに任せておけ。両手を縛り終わると、目を閉じろと言う。女は温かく柔かい手のひらで彼のまぶたをさぐり、フランネルのような布きれをあて、生温かい膏藥を左目に貼りつけた。右の目も同じようにして塞ぐ。その上からさらにサングラスをかけさせた。彭年の顔に両方の手を当てると、「どうかしら？」とやさしく尋ねてきた。

彭年は苦笑いを浮かべるしかなかった。「すごくいい気持ちだよ！」彼は答えた。正直なところ彼はいくぶん感激していたのだ。

女は彭年の脇を抱えるようにして数歩歩くと、何かごそごそやってから彼に座るように言った。彭年が床に腰を下ろそうと構えたところ、腰掛けに突き当たった。部屋の敷居も越えず、何の障壁に当たってもいないのに、もうあの空き部屋を出たというのだろうか？ 女はしゃがみこんで彭年のために靴下のしわを伸ばし、裏側のほりを払い、それから革靴をはかせ、靴ひもをきちんと結んでくれた。彭年の腕をとって立ち上がらせると、いかにも楽しく笑って言った。

「さあ、出かけましょう！」

二人は、しばらく平らな路を進んだが、次第に歩き辛くなった。女は一方の手で彭年の腕をと

り、もう一方の手で彼の腰を抱きかかえ、またがせたり、屈ませたり、背伸びをさせたりする。角をいくつも曲がった。それから女は歩みを止めて言った。「ゆっくり！ ここは階段よ。」とても狭い階段だった。十段毎に踊り場がある。ぐるぐる回ったので彭年は頭がくらくらしてきた。足を滑らし、もう少しで転げ落ちようとするところだった。女がさっと引いてくれたので、二人は尻餅をつき落ちずに済んだのだ。女はあえぎながら笑いだした。「そんなに可笑しいかい？」彭年が苛立たしげに言う。女は答えず、笑うのをやめ、立ち上がって彼を支えると、ゆっくり這うように階段を下り始めた。

やっとのことで最後の階段を下りた。そして壊れかけたセメントの床を踏み、足を上げたり下げたり。東に曲がったり西に曲がったり、それから、彼らは敷居を跨ぎ、土の上を歩いた。夜風が顔にあたり、もう建物の外に出たようだった。道はまた平坦になった。彭年はこの時再び、女の身に漂う香りに気がついた。近づくと髪にふりかけた香水やファンデーションの香りであることがわかる。相手にびたりと身を寄せているとふんわり温かみを感じられる。彼は突然立ち止まって言った。「きみが誰だか知っているよ。」女はくすくすと笑った。楽しくてたまらないというように。彼は苛立ち「僕を引越させろと言われているのかい？ それとも家まで送る言うに言われているのかい？」と尋ねた。女は笑うのをやめ、彼の手の甲を軽くたたきながら言った。「大声をたさないで、後ろに人がいるのよ。」彭年は後ろに誰か人がいるとは信じなかった。背後からは何の物音も聞こえない。それでも彼は危険を犯そうとはしなかった。第一、こういった連中とやり合うこともないのだ。二人は、しっかりと身を寄せあってゆっくりと歩いていった。まるで恋人のように。

どの位歩いただろうか、女は立ち止まると言った。「さあ着いたわ、ここでお別れよ。」そして何かの包みを彭年のポケットに突っこむ。ぼんぼんとポケットの上からたたいて「何も聞かないことよ。」と笑った。「よくもまあぬけぬけと！」彭年はふんと鼻先をならした。女は耳元に口をよせ声を低め、早口でささやいた。「明後日午後五時、公園入り口の市電の停留所で待ってて。あたしに声をかけちゃ駄目よ。」

「きみの名前も知らないんだぜ。」彭年は言った。

女はそれに答えずただ笑うばかりだった。そして、彭年の手を縛っていた紐の結び目を解くと、後はごゆっくりご自分でなさい、騒いだり変なことをしたりしないでねと言ひ、彭年の顔をぐいっと引き、自分の頬を寄せたかと思うとさっと身を翻して走り去った。

彭年は、両手をひねったりねじ曲げたりしていたが、そのうちだんだんと紐もゆるんだので、眼鏡を外し、膏藥を剝がした。まるで殻を脱いだかのようにさっぱりとする。彼は、自分が高い塀沿いのひっそり静まり返った小道に立っていることに気がついた。気を落ち着け、足に任せて小走りに少し進むとすぐにぎやかな通りに出た。三輪車が客を乗せて飛ぶように走っている。

ポケットをさぐると、財布の他に紙の包みがあり、何か柔らかいもので堅いものを包んであった。例の品か？ 触るほどにそれらしい気がしてくる。ただこの時はもうびくついていたので通りであけてみる勇氣もなかった。少し歩き人力車を雇う。車に乗りこんでから、恐る恐る取り出し、包み紙を破り中の綿をよりわけてみた。薄暗がりにはきらきら輝くものは、果たしてそうだし、それでも半信半疑だった。奴らは早くも偽造品をもうひと組み作ったというのか？ でも偽物を作る必要がどこにあるんだ？ 彭年は考えれば考えるほどわけがわからなくなった。本当にあの

女が救ってくれたのか？ それなら彼女は奴らとグルじゃないってことかい？ でもどうやってこれを手に入れたんだ？ もし、これが偽物だったら、叔母にどうやって金を渡せばいいんだ？ そもそも、今度のことをうちのものになんて説明すればいいんだ？ 彭年は嘘をつくことが苦手で、口を開く前に顔が赤くなってしまうのだ。どうしようか？ 家につくまでにまだ間がある。突然彼は目のまわりに膏藥の黒い痕がついていることを思いだした。あわてて綿をちぎり、丸い痕が残らないように辛抱強く何度も丁寧にふき取った。

家につくとすでに二時をまわっていた。家のものは寝室に引き上げていたというものの、実際は小さい子たちは別として、誰も眠ってなどいなかった。それで、物音を聞きつけて、皆が集まってきた。彭年の帰りだとわかると、口々にことの次第を尋ねる。その口ぶりで大騒ぎになっていた。そこで彭年の父親がすぐ巡査に報告した。母親は直ちに叔父に連絡した。(母親と義妹の不仲がわかりだろう！)叔父と叔母は大喧嘩で離婚話さえ持ち上がった。彭年は急いでポケットの中から紙包みを取り出し皆の前で開いた。明かりに照らされた指輪とプレスレットは、誰もがよく知っているものだった。喜びに涌く中で皆がわけを知りたがった。彭年は口を開きかけたが、突然真相を言うべきではないと思った。前もってはうまい口実は何一つ浮かんでこなかった。この時には、もう口元をついて出んばかりである。彼は笑いながら話した。「あの碌でなしども、僕を酔いつぶしてから、うまいこと安く売らせようとしたんだ。それで酔った振りしてまる一日寝ててやったのさ。やつらときたら、それでも懲りずに放そうとしないんだ。やつらが麻雀に夢中になっているのを見計らって、こっそり抜け出してきただよ。」父親はほと

安心すると、本当に酔ったんじゃないのなら、一昼夜寝てることもないじゃないかときつく叱った。彭年は弁解しなかった。母親の方は、もうすっかりうろたえていた。空騒ぎとわかって、ただもう大喜びするばかり、息子に恨みごとを言う気もなくなっていた。彭年の作り話は予想外に成功しようだった。

翌日、食事を済ますと、彭年は令儀に会いにいくと言い出した。しかし、彼は先に朱の家を訪ねた。奇妙なことにその家は、朱という姓ではないという。主人もその妻も居合わせていた。彼らは古くからの借家人だったが、朱とかいう姓の人間は知らないということである。どうしようもなかった。どうも腑に落ちぬままに彭年は令儀に会いにいった。まず陳叔母さんの詮索をどうにか切り抜けた後で、令儀にこれまでの経緯を始めから話して聞かせ、一体どういうことなのかと彼女の答えを待った。

令儀は言った。「ごくありきたりの詐欺よ。」

彭年は水をさされた感じだった。無理に笑いを浮かべて言った。「もちろんそうだけど、でも、なぜ物をまた僕に返してきたんだろう？」

「怖くなったんじゃない？」

そんなことはありえないと彭年は首を振る。あれこれ考えてみても、ほかのうまい説明が見つからない。想像するに、恐らく、あの女は、女探偵で、義侠心に富んだ人物じゃなからうか？令儀はぶっと吹き出し、手にしたお茶をみな服にこぼしてしまった。彼女は慌ててハンカチで拭き取る。彭年は恥ずかしいやら、悔やしいやらで、依怙地になって言った。「笑うことはないじゃないか。世の中には不思議なことがたくさんあるんだぜ！ ぼくの同級生の姉さんなんか、

探偵になりたくて、オートバイや、ピストルとか、電車への飛び乗り、変装、尾行なんか習って、やくざたちに交じって……」

「Romanesque！」令儀はこともなげに笑った。

「なんだよそれ？」彭年は彼女が横文字を使うのが気に食わない。「横文字じゃわからないよ。」腹立たしげに彼は言った。

「そうじゃなくて？ まるで小説の世界じゃなくって！」令儀はこらえきれずに、また笑い出しました。

負けじと彭年は憤然としてやり返した。「たしかにこの身に起こったことなのに、君をだましてるって言うのかい？ 君が経験しないことは、作り事で、小説みただって言うのかい？」彼は怒りのあまり、座っているのもどかしく、立ち上がると大股で窓際まで行き、また大股でもとの席に戻ってきて、鼻息も荒く座りこんだ。令儀は笑いながら弁解した。信用していないわけではないけれど、その女性がもし仲間でないのなら、なぜ目隠しをしたのかしら？ これには彭年もぐっと詰まってしまった。彼が言ったことも当て推量にすぎないのである。しかしどうあろうとこの身に起きたことはすべて事実なのだ。人生がこんなに奇妙で面白いとは意外だったが、令儀は本の虫さ、不思議なことは小説の中だけしか起こらないのかい？ 彼は一歩も譲りたくなかった。停留所での約束を彼女には話したくなかった。「まるで小説ね。」とまた笑われるのはごめんである。彼は「じゃあまた今度。」とお茶を濁すと、まだ少々むっとしながらうちに帰ったのだった。

約束の時刻が待ちきれず、彭年は早くから市街電車の停留所で待ち構えていた。ちょうど最も

こみ合う午後の五時だった。オフィスからでてきた事務員、授業を終えた教師や学生たち。疲れ切って荷立ち、そわそわと電車の来るのを待っている。彭年は後ろの人に順番を譲っては、電車が人々を乗せて一台また一台と去っていくのを見ていた。彼は人を待っている（自分でも誰を待っているのかはつきりしないのだが）ことを誰かに見透かされはしまいかとびくびくしていた。あちこちきよろきよろ見回して、目についたのは、曲がり角からこちらに向かってやってくる歳の頃十六、七の女学生だった。彼女に間違いない！ 青い短いスカートの下にゆったりとした丈の長い上着をまとい、白いブラースをのぞかせている。短い靴下に底の平らな靴、本を二冊小脇に抱えている。全く化粧つけない真つ白い肌で、口紅すらつけていない。娘はまるで関心がない様子で彭年の方を見ると、一人の太った女性のわきに立った。彭年はそとと彼女を盗み見たが、見ればみるほど疑わしくなる。あの女だろうか？ たったの十六、七歳？ 髪は特に手入れするでもなくストレートに流し、弓を張ったような口元をしている。あの女の目にはこんなに落ち着きがあったっけ？ どうもこんがらかってきた。確かあの女の頸には笑くぼがあったはずだが、向こうは、彭年がそととうかがっているのに気づいたかのように、かすかに顔を背けてしまった。もし誘いをかけてきたのがこの娘ならば、目配せぐらいはしてくれてもよさそうなものなのだが？ だが彭年は、見た瞬間、確かにびんときたのである。

電車がきた。その娘は素早くこみうあう電車の中へ乗りこんでいった。考えるまもなく彭年も慌てて押し入ったが、乗りこんだたとんに、人違いではなかったかと後悔した。自分を誘ったのが、十六、七歳の女学生だなんて？ 停留所を四つか五つ過ぎると、電車がまだ止まらないうちに、彼女は降車口に近づいた。彭年がまだ自分を見ているのを目にとめて、弓を張ったような口

元をかすかに動かし、笑いともつかない笑みを漏らした。彭年は内心大いに疑わしかったものの、思わず後について電車を降りてしまった。

彼女はにぎやかな大通りからやや奥まった静かな通りへと入った。小さなレストランに入る。そのまま二階に駆け上った。女学生がこんな時間に家に帰らないで、レストランに入る？ 彭年は気を大きくすると後に続いて二階に上がった。彼女は垂れ布をめくり、一つしかない小部屋にはいりこんだ。彭年も後に続いて足を踏み入れた。このとき女学生は後を振り返り、二冊の本をテーブルの上にどさっと置くと、彭年に向かい眉を上げ瞳をきらりとさせて愉快そうに笑いだした。この笑い声には覚えがあった。相手は芝居がかった大仰な身振りで彭年にお辞儀をすると言った。「あなた様のお名前をお聞かせ願えませんか？」彭年は、呆気（あき）に取られた。が、こう問いかけて、うまい答えを思いついた。「お嬢さん、どこかでお会いしたようですね。」彼女はいたずらっぽく両目をきらきらさせ、整った鼻筋に皺を寄せ、くしゃっと顔をしかめてみせた。二人は同時に吹き出してしまった。

このとき、ボーイが茶を注ぎに入ってきて注文をきいた。娘はさっと笑いを引っこめ、いとも淑やかに腰をかけた。この時分は中途半端な時刻だった。軽食には遅すぎるし、夕食には早すぎる。店には一人も客がいなかった。彭年が何を食べるかと尋ねると、彼女はここには始めて来たので、何がおいしいのかわからないと答えた。二人は適当にいくつかの料理を注文してボーイを追い払うと、小さなテーブルに向き合って腰掛けた。

彭年は、彼女にお茶をついでやりながら、相手の目を見つめて言った。「さあこれで二人は知り合いになったね。」

彼女は首を左右に振りながら冗談まじりに口を開いた。「あなたが私のことをワルだと思ってやしないか心配したの。」

「僕はそんなに馬鹿かい？　もし君を疑っていたなら、一人で来るかい？」彭年はあわてて言いながら、ふと思った。彼女が声をかけなかったのは、疑われていると思っただろうか？　誰か人をつれてきて捕まえるかもしれないと恐れていたのだろうか？　疑いが頭をもたげてきた。「だけど、なぜあなたは来たの？」彼女は微かに目を細め、猫が鼠を狙うような目つきで彭年を見つめた。

「まず第一に、君にお礼をいわずにいいけない。第二に、事情がよくわからなくて……」

彼女は口をすぼめると、両肩をちょっとそびやかして、誤解されたといわんばかりに恨めしげに瞳を見開いて言った。「私ならわかっているともいうの？　たまたま余計なことをしただけよ。もし本当に感謝してくれるんなら、あれこれ問いつめないで。疑ってるんじゃないからね。」

彭年は、一度も疑ったことなんてないと事実と相違して答えた。ただ事があまりに不思議だったもんでね。

彼女は言った。「信じてくれてるなら、私のいうことを聞いて頂戴。不思議だろうがなんだろうが、もう二度と聞かないこと。もう二度とあの人たちを捜さないこと。計画が皆おじゃんになったのよ。今度会ったら、ただじゃすまないわ。」

「わかってるよ。」彭年は答えたが、腹の中であんなに思っていた。ただじゃすまない！」

「それに、もし、あなたが品物を失ってなくて、それに私が関係してることをやつらに知られたなら、私が大変な目にあうのよ。」真剣そのものの彼女は、十歳も年を取ってみえた。

彭年はなんとなくわかったような気がした。「この娘がこっそり取り戻してくれたってわけかい？」密かにこう思うと、もう二度と蒸し返そうとは思わなかった。彼はきっぱりと言った。「わかった。君の言うとおりにする」

「きつとね？」

「二度と聞かないし、二度とやつらに構わないよ。きつとだ！」

彼女はバツと笑った。手を差し出し、手のひらを開いた。彭年はその意味がわからない。彼女は手のひらにブツと唾をつけ、彼をびしゃつとたたく真似をした。彭年は思わず笑った。彼女も笑う。二人は子どものように可笑しかった。どちらかの手が湯呑みにあたってお茶をひっくり返した。彼女はテーブル一杯にこぼれた茶を、手でさつと床に拭き落とした。そして濡れた手をハンカチで拭こうともせず、手の平をふうふう吹いて乾かそうとする。彭年は大きなハンカチを取り出して彼女の手をこし拭いてやり、乾いたかきと尋ねた。彼女は手を引っこめようとしたが、彭年はしっかりと放さず、にやにやしながら言った。「失礼ながら、あなた様のお名前をうかがっておきませぬ。」相手は笑って答えない。「けれどもご芳名は承知しますよ。」彭年はいたずらっぽく笑って言った。「梅、梅お嬢さんですね。」

彼女はさつと手を引っこめた。「誰が言ったの？」

「あの日、例の透明な客間で初めて君を見かけたとき……」

「ああ！」彼女は安心したように溜め息をついた。「でも梅の花の梅じゃないのよ。五月のメイ・MAY」

「横文字の名前かい！」彭年は、彼女があそこで勉強しているということも不思議だった。たし

かに学生のようにある。「先生がつけた名前かい？」彼女はうなずく。彭年は思った。この娘はきっと家のものに隠れて外で遊び回ってるんだらう。自分と同じように落ち着いて勉強しないで、ちんびらたちとつき合っているのかもしれない。彼は、好奇心にかられて尋ねた。「どの学校に行ってるんだい？」

彼女は微笑んだ。答えたくないときはいつも微笑むのである。

彭年は彼女の本を見ようとした。彼女はさっと本を取り上げてお尻の下に敷くと言った。「私の成績を知りたいの？ 零点よ。」

この時ボーイが料理をもつて来た。垂れ布の外ではお客が一人二人来ているようだった。そろそろお腹がすいてきたねと二人は言い、梅が主人役をきめこみ、料理を彭年に取り分けてやる。彭年もホスト顔で料理が至らぬと詫びをいう。二人はたわいもない冗談を言い合っては笑いながら、料理をすべて平らげてしまった。彭年が、今までこんなおいしく食べた事がないと言う。梅は、今までこんなに楽しかったことはないと言う。二人は互いに見つめ合った。全く隠しだてなく互いの瞳から心の内を見合っていた。笑いが徐々に愛情へと変わり、二人の瞳のなかでじつとどまっていた。

梅は恥じらうことなく瞳をきらめかせて笑った。「今日は楽しい？」彼女が尋ねる。彭年は、思わず溜め息をついてしまった。梅にはその様子がいかにも可笑しい。どうしたっていうの？ 彭年自身もどうしてなのかわからない。いつまた会えるのかとだけ尋ねた。

梅は一瞬考えこむと、あどけない表情が消え失せた。眉を微かにひそめて、溜め息までつく。ある場所の名がのろのろと口から出た。来週の今日、同じ時刻に尋ねに来てもいい。そこは親友

の家の。でもそのほかのときは、絶対に来てはだめ。それに早く来すぎてもだめ。彭年が「手紙を出してもいいかい？」と聞くと、彼女は首を横に振った。「電話は？」彼女はまた首を横に振る。彭年が脇まで行って問いつめる。「なぜなんだい？」彼女は顔を背け床に目を落としてしまった。「じゃあ」彭年が言う。「君の方から電話や手紙をくれるね？」彼は自分の住所と電話番号を告げた。メモしたらと言う。だいじょうぶよ、おぼえているから、梅は答えた。

この時分になると、部屋の外がだいぶにぎやかになってきていた。梅はまず垂れ布をまくりあげてあたりを見回すと、彭年に向かって言った。「もう行かなくちゃ。まず私が行って十分してからあなたが出てね、いいかしら？」彭年はもちろん承知する。梅が二つの杯にお茶をつぐと、二人は杯を合わせ、酒を飲むように一気に飲み干した。杯を置いた彼女は、一歩あゆみ寄ると両手を彭年の肩にまわし、顔を上げて目を閉じた。そして微笑を浮かべてじつと待っている。彭年はそのままごく自然に彼女の願いに応じた。左頬、右頬、左のまぶた、右のまぶた、顎の笑くぼ、そして唇に。梅の両腕はだんだん彭年の首にきつくまきつき、しまいにはどちらがどちらに接吻しているのかわからなくなってしまった。

突然、梅は両腕をはなし、身を振りほどくと、体を斜めにして素早く垂れ布沿いに移動し、出て行った。彭年の胸は狂おしいほどに高鳴り、もう少しで後を追って飛び出すところだった。彼は、まず気を静め、冷めて苦くなった残りのお茶をもう一杯飲んだ。ふと梅の席に本が二冊忘れられているのに気づいた。取りに戻ってくるかもしれない、一瞬期待に胸がおどる。手に取ってみれば、ぼろぼろになった阿片の安全禁断法である。本の後ろ半分はその種の薬局の広告で埋まっていた。もう一冊はまだ本らしい体裁を整えており、因果応報勸善を説く仏教書だった。二冊

とも真新しい表紙がかけてある。

ボーイが垂れ布を上げ皿を片づけに入ってきたが、払いはすでに済んでいた。

彭年は悶々として家に戻った。階段の途中で、上から令儀が一步一步ゆっくりと降りてくるのに出くわした。首をねじって肩越しに二階の誰かと話をしている。彭年は誰にも、特に令儀には会いたくなかった。彼は部屋にこもって、ひとり静かに考えたかったのである。どう考えてもよくわからない。尽きせぬ思いに浸っていたかった。けれども令儀の目はすでに彼の姿を捉えており、「あら、彭年、私もう帰るわ。」と、よそよそしく言う。

「そんなに忙しいの？」彭年も気のないあいさつを返す。

「いいえ、これ以上あなたを待たなければならないのよ！」令儀はもう限界だといわんばかりに言い放つと、振り返りもせずに戸口から出て行ってしまった。それでようやく彭年は、今日が例の「いつもの時」だったことを思い出した。令儀は毎週この日、ロシア人の家でピアノを習った帰りにきまって彭年のところに寄っておやつなどを食べながらおしゃべりをしていく。彼は綺麗さっぱり忘れていたのだ。

彭年は、これまで眠れないということなどなかった。今夜は一晚中まんじりともしない。あれこれ考える。どうもあの女は怪しい。他の人間なら神秘さに魅力を感じるかも知れないが、彭年はとてもじゃないがやられてられない。明らかに不良のくせして、女学生なんかには化けたりして。あんな奇怪な行動をして、一体何を企んでいるんだろう？ それなのに彼女のの前では、彭年は手も足も出ずに相手の言うなりになってしまうのだ。彼は自分に対してすら自信がなくなってしまう。この次の約束には絶対行っちゃいけない。彭年はある考えを思いついた。明日令儀に会っ

て謝った上で、梅との約束の日に令儀を新劇に誘う。こうすれば僕だって絶対会いに行ったりしないだろう。ところで、令儀に梅との約束のことを話したほうがいいんだろうか？ 彭年はそうしたくなかった。「そんな必要はないさ。どうせ綺麗さっぱり忘れるつもりなんだから。」彼は呟いた。

こう決めると、彭年は安心し、深い眠りに落ちていった。見た夢はとりとめのものだった。いつも梅が現れていた。目が覚めても心地よい甘さが残っていた。しかし、頭がはつきりするにつれ、彼女を夢でみるとはなんてことだ、と恥ずかしかった。服を着ても、ぼんやりして気分がさえない。どうしたらいいのやら見当もつかない。

令儀のもとを尋ね、新劇をみ、授業に出て、食事をし、寝る。毎日がどうしようもなく長く退屈だった。同時に、一日がひどく短くてつまらなく感じられた。今や梅とは関係を断った（彼女は手紙も電話もよこさなかった）のだから、もう好きに思い出してもいいだろう。どうして彼女のことを疑ったりしたんだろう？ どんなに彼女の行動が奇妙で不思議であっても、彭年はやはり彼女への思いで胸が一杯になるのだった。たとえ強盗悪人であったとしても、彼女はやはり素敵だった。それに、彭年は、彼女がそんな人間ではないと信じていた。相手が真心で接してくれたのに、なぜ避けてしまったんだろう？

何事にも気乗りがせず、彭年は、勉学に精を出すようになった。その日の夕方、彼は、計算問題をやり友人のもとに出掛けた。道をまちがえ、汚くごみごみとした狭い通りに入りこんだ。歩道は半分がでこぼした泥道となっていた。人力車が縦横無尽に慌ただしく行き交う。道を行く者は、せかせか歩く者のろろ歩く者も、通りの中央、脇とあたり構わず押し合いへしあい

している。彭年は右、左と身かわしながら車の隙間を縫っていった。前を行く者が、わざとじやまするかのようになり、前にも進まず、身をわきに避けて通すこともしない。怒り心頭に達した時、数人隔てた前方で、変わった服を着た二人の娘が、手をつないで悠然と歩いているのが目に入った。あたり構わずおしゃべりしたり笑ったり（こういう連中はかりの通りだ！）、一人はスラックスに柄ものの上着を着ている。黒くて硬い髪をそのまま流していた。一人は、どんな服を着ているのかはつきりしないが、深紅の短いコートをおっている。茶色がかつたなめらかな髪の毛は、きれいに大きくカールしている。彭年はたちまちに見てとった。梅である。

彭年の心は躍った。追いかけていって声をかけようとした。いや、と思い留まると、後をつけてどうするか様子をうかがうことにした。彼女たちは買物を済ませたばかりであった。梅は腕に大きなバンを抱え、一方で油のしみた包みを下げていた。汚らしい路地にゆっくりと入っていく。路地の入り口では、灰色や焦茶色の髪の毛をした青白くて痩せた子どもたちが「積木」をして遊んでいた。一人の子どもが、甲高い声で「梅！」と叫ぶと、スラックスを穿いたほうが、ピーナッツをひとつかみ放ってやる。二人は一緒に裏口から入っていった。戸口では、土気色の顔をした太った混血女が洗濯をしていた。彭年はごみ箱のわきに立ち、スラックス姿の娘が出てくるのを見ていた。彼女は若く小粋で、大理石がかった色の肌をし、その目は梅よりもさらに大きかった。娘は上を見上げて建物についた窓に向かって「バイバイ」と叫んだ。上からも同じ返事が返ってきた。梅の声である。

彭年はどうしようか決めかねて、しばらくたえずむ。人目につくのが心配になり、足早に路地から立ち去ることにした。勝手に人の家に押し入るなんてむちゃくちゃだ。住所を覚えておけば

手紙を書くことだってできる。彼はこう考えたのである。しかし、ベッドにはいつてから、なんて臆病だったんだとしきりに悔やまれた。大したことないじゃないか？ まちがって他人の家に入りこんで、追い出されたにしても、それがどうだって言うんだ！

翌日の夕方、彭年は同じ場所に出かけて行った。同じように焦茶や灰色の頭をした青白く痩せた子どもたちが路地口で遊んでおり、同じように土気色の顔をした太った女が裏口で洗濯をしていた。彭年は敷居を跨ぎ、太った女の横を擦り抜けたが、相手は顔を上げようとしなかった。トンネルのような暗がりの中で階段を探り当てると、向かい側はちょうど調理場だった。羊肉やら玉葱やら溶けたマーガリンの匂いやらがあたり一面にたちこめ、べとべとと身体中にまとわりついてくる。彭年は注意深く一步一步階段を上がっていった。最初の踊り場を曲がったところで、突然一尺あまりの炎がめらめらっと吹き出した。慌てて歩みを止めた。中二階で誰かが石油コンロに火を起こしていたのだ。なんとここには灯油があるのだ。火を起こしていたのは中年の男で、人が来たのを見ると、コンロをわきよけて通してくれた。階段を上がっていく人間にまったく興味を示さず、そのまま自分の事にかかりきりである。彭年は問いかけようと思ったが、男の急がしそうな様子を見て、自分で上がってみるしかない、と思い直した。

さらに数段上がると二階の正面の部屋に突き当たった。ドアは閉まっている。彭年がどうしようかと迷っていると、濃厚な阿片の臭いが鼻をついた。見上げると、上の中二階のドアが半分開いているのが目に入った。そっと足早に上がっていきながら、振り返って肩越しに中をうかがう。この中二階の部屋は模様のついたピンクの壁紙がはってあった。天井は丸い。まるで小さな船倉のようである。幅の広いベッドがおいてあった。その前には四角いテーブル。ベッドの上にはひ

どく汚れた派手な薄絹の掛け布団がたんである。白粉を厚く塗った丸顔の女が、靴を脱ぎ、床に片膝をつけるようにベッドの縁に斜めに腰掛け、テーブルの鏡に向かい眉を描いていた。もうひとり、瘦せた女が、こちらに背を向けた格好で、椅子のうえの小鍋に入っている阿片をかきまぜている。彼は慌てて身を翻すと、急ぎ抜き足でさらに上へのぼっていった。人が阿片を燻らしているというのに中に入っていけるかい？ 彭年は軽率だったと後悔し、やはり帰ろうかとも思った。あの船倉のような部屋を目にして、ここがどういう所かはっきりわかったのだ。

さらに八、九段階を上がると三階正面の部屋である。彭年が、五段上がったところで、突然目の前が明るくなった。上のドアがぱっと開いたのだ。続いて怒鳴り声、足を踏みならす音、ものが壊れる音が聞こえ、女が一人転がり出てきた。まるで暴風雨をドアで遮っていたのが、窓を開けた途端、疾風と豪雨が一気に襲いかかってきたようだった。女は「みんながなんて言うか聞こうじゃないか！ あたしがひどいことでもしたってえのかい！ え！ そうなのかい！」と叫びながら、正面から彭年によつかつてきた。

「あれ？」女は体を持ちなおすと言った。「あんた、誰に用なんだい？」

この時、入り口から赤い服をきた女が飛び出てきた。梅だ！ 両手を腰にあて、応戦すべくまさに身構える。と、彭年に気がつき、彼女はあっと立ち尽くしてしまった。彭年が、何か言おうと口を開く間もなく、梅は彼を階段の上まで引き上げ、部屋に引きこんだ。ボタンとドアを蹴って閉め、背中を押さえつける。彼女は両手で彭年のシャツの衿首をつかみ、彼の胸に顔を埋め笑ったり泣いたり、狂ったような騒ぎであった。

外の女がドアがきしむほど力一杯押してくるので、梅は背中で押さえきれなくなった。彼女は

必死になって押し返そうとして、彭年から手を放し、くるりと振り返り、カチャッと鍵をかけた。そしてくっくっとして笑う。ドアの外の水が足で蹴る音がどんと響きわたった。

この時になって、彭年の目に部屋の惨状が映った。床には、クリームのビン、スリッパ、ハイヒール、服、絹の敷き布団、ハンガー、靴の型いれがあちこちに投げ捨てられ、床からテーブル、椅子の上と、ところ構わずランプが散らばっていた。梅は部屋のなかの戦いの跡を眺め、ぽかんと立っている彭年を見ているうちに、何かがおかしいと気づく。「どうしてここがわかったの？」彼女は夢ではないかと、自分の腕をぎゅっとつねった。

「ここが君のうち？」彭年は一歩近づいて小声で尋ねた。

「そうじゃないって言われてもそうよ！ ここに住んでやる。絶対に出ていかないから、絶対！」彼女は足を踏みならしながら一言ごとに声を張り上げて言った。

ドアを蹴る音が突然止んだ。女が盗み聞きしているのだろうか？ 梅はドアに目を走らせるとびたっと口を閉ざした。片手で彭年をつかみ、浴室の入り口まで引いていくと早口でささやいた。「どうしてわかったの？ こんなところに来ちゃだめよ！」彼女は彭年の手を握り締め、つかえつかえ、言葉も途切れがちに続けた。「毎日毎日、あなたのことを想ってたの、毎日、死ぬほどよ。」こういう間にも、瞳はみるみるうちに涙で溢れかえる。彭年は無言のまま、彼女を抱き寄せるばかりであった。

それから、梅に昨日二人を見かけたいきさつを話した。あの人は仲のよい友だちだと梅が答えた。二人は言うともなく、前回のデートのことを思い出していた。溜め息とともに梅が言った。

「わかってたわ、そのうちあなたに会えなくなるって。思いもよらず、今日……」

彭年はきつく彼女を抱き締めた。「もう二度と逃がさないよ。今度という今度は君の隠れ家をつけたんだからね。」

「ここは莉莉の部屋なの。」ドアの方を指さして彼女は言った。ドアを蹴る音がまた始まっていた。

「あの女は君とどういう関係なんだい？」

「母さんよ。」彼女はこういってふっと笑った。そして彭年を見上げ「さあ、これで皆わかったでしょう。それでも私とつき合ってくれるかしら？」その笑いは痛いたしげだった。

彭年は彼女の髪にくちづけしながら言った。「最初から言ってくればよかったのに。」

「もっと早くから、あなたが、私が心に描いていたような人だとわかってたら……」恥ずかしそうに、彼女は途中で言葉を切った。

「梅！ どうしたんだい！」外で、女が怒鳴った。

「行って！ もう絶対に来ちゃだめよ。告げ口されるわ。」梅は彭年に向かい早口でささやいた。

「誰に？」

「詳しいことは明日話すわ。明日、食事が済んだら、やっぱり私の友だちの部屋で。覚えてるでしょ。」

覚えていると彼は答えた。

「きっと来るわね？ きっと、きっとよ！」

彭年は哀願する彼女の顔を見ると胸を刺される思いがして「きっとだ。」と答えた。梅は言った。ドアを開けたらさっと出ていって。振り返ってもだめ。面倒なことにならないよう、ともか

く早く。

ドアの外の女は、怒り狂ったように、ドンドンドンドンとドアに背を向けて後足で蹴っている。梅は音もたてずに鍵を回し、さっとドアを開いた。莉莉が勢い余って部屋の中にもんどりうって入って来た。彭年は体を横にするかわきからすると外に滑り出ていった。後ろでがしんとドアの閉じる音が聞こえた。彼は振り返りもせず一気にかかけおりにいく。まるで夢を見ているようであった。

次の日、梅は、父親が外国の水兵であるとありのままを語った。母親は早くに亡くなり、彼女を育てたのは莉莉であった。中二階の女たちは皆友人で、彼女は今年十八歳。五月生まれ。誰が名づけたのか知らぬが、皆は梅とよぶ。姓はない。その必要もない。学校にいったことなどないから。字は多少知っている。しかし書けない。

彭年が彼女の顔に両手を当てしげしげと見つめると、彼女は時には十五、十六歳に、時には二十八歳よりさらに上に見えるのだった。

梅は、彭年のダイヤの指輪の詐欺事件について語り始めた。彼女は一味を知っていた。朱という姓の男はここ数日身を隠しており、あの家に住んでいる者も皆ぐるである。いずれにしろ、彼らがやることなすこと皆まともではないから、騙されないように。

元々の計画は至って簡単だった。彼を酔いつぶして家に送っていき、その途中でものを取ろうというものである。ところが、料亭を出ようという時になっても、彭年はあまり酔っ払っておらず、少なくとも支えがあれば真っすぐに立てた。彼らの予期しなかったことに、彭年は酔ってはいたものの何か察したようすで、本人には覚えはなくとも、手足を振り回してしっかり守りを固

めていたらしい。時刻はまだそれほど遅くなく、一緒に車に乗ったやつは、元来大口叩きの能無しで、車夫に人通りのない道をいくように指示することもできず（車夫も彼らの一味である）、なんと彭年を別の隠れ家に連れていき、薬を大量に飲ませたのである。彼が死んだように眠ってしまったものだから、もちろん車夫は、家まで送ろうとはしない。それで真っ暗やみのなかを例の空き家に運んだのだ。二人の抜け作は自分の面子を取り繕うために、彭年の家は金持ちだから、身柄をたてにちょっとした金をしぼれると言ったのだった。あとで李永貴がこれを知って——李永貴がボスなのだが——かんかん腹を立てたのである。そして、梅は言った。「私が出ていて丸く収めたの。私があなたを外に連れ出すわといったわけ。」

「君はやつらとそんなに親しいのかい？」

梅は寂しげな笑いを浮かべて言った。「永貴はずっと前から私を欲しがってたの。私は承知しなくて。だってあいつはならず者でしょう。——指輪とプレスレット、あれはやつからの贈り物よ。」しばらく沈黙が続いたが、溜め息とともに言葉が漏れた。「本当はあいつがくれるものなんか欲しくなかったわ。あいつにものをねだったことなんて一度もないのよ。——あいつがただでくれると思って？」

彭年は、自分が叔母のためにしたつまらぬ親切が、梅にこんな大きな仇^{あだ}になっていたとはまったく思いもなかった。

「あなたのことが心配だったのよ。」梅の説明は至って簡単だった。彼女は、なぜ彭年のためにこんなに気をもむのか深く考えもせず、彼のために進んで「ならず者」の贈り物を受け取ったのだ。

彭年は返す言葉もなく、しっかりと梅の手を握り締めた。

「あいつには、別に女がいるのよ、でも——」彼女は頬を赤く上気させながら、いまいしげに言った。「あいつのお相手なんてこれっぽっちもしたくないのに、向こうが言い寄ってくるの。四六時中つきまとって目を離さないのよ。」

「君がやつを売るとでも思ってるのかい？」

「そうかもね。でもあいつのやっていると、私はたいして知らないのよ。やつはね、私にほかに好きな人ができるんじゃないかと妬^{ねた}んでいるのよ——」彼女はおずおずと顔を上げ、彭年のほうを窺^{うかが}いながら「私には前に別な人がいたから。」と言った。

彭年はうなずいた。

「その人だって、私から好きになったんじゃないわ。それに、そんなこと、とても許されないわ！ 莉莉だって私を追い出そうとしているのよ——もしこうして二人一緒にいるとこをやつに見られたら、もうおしまいだわ。」両方の瞳でじつと靴先を見つめる彼女の眉間に、微かに皺が三本寄ったその様は、まるで苦勞をなめつくした中年女のようなだった。

突然、彭年は言った。「逃げたらいいじゃないか？」

「どこに逃げるの？ 上海から逃げ出さうって言うのならともかく。」

「簡単さ、僕が君を天津に連れていくよ。」

梅は飛び上がらんばかりに喜んだ。彭年は彼女に、知り合いが天津で工場をやっており、手伝わないかと声をかけられているのだと話した。二人は真剣にこと細かく相談をはじめた。話せば話すほど興が乗り、話題は際限なく広がっていった。それでも、梅が時間を思い出し、あわてて

帰ろうとした。彭年は、今日さっそく計画を進める。明日もう一度会って逃亡の段取りを決めようと言った。梅は会う間隔がせまいことに戸惑いを見せていた。「怖がることなんかないさ！」彭年は屈託なく笑って言った。「明日、明後日、明々後日には出発だ！」彼らは喜びに酔い痴れ、大胆にも二人で一緒に門のところまで行き、ようやく別れたのである。

彭年はひと晩かけて計画を練り、午前中一杯かけずりまわった。そして食事を済ますと喜び勇んで梅に会いに出掛けた。梅の友だちが住む家を又貸ししているのはロシア人だった。各部屋は、職をもった独身の男女に家具ごと貸し出されており、住人の多くはロシア人が混血である。食後のこの時分になると、皆留守にしていた。屋敷全体が静まりかえり物音一つしない。梅は用心深く錠をおろす。二人は心おきなく話を続けた。事が順調に運んでいるので、彭年はきわめて樂觀していた。梅も樂觀していた。「あいつ」は昨日も二言三言尋ねただけで、今日の外出にも何も文句を言わなかったのだ。「でも」と梅は体をこわばらせて言った。「昨日戻り途中、あの『朱夫人』、あなたも会ったでしょう、彼女を見かけたような気がするの。それでもう、心配でたまらなくなってしまう。でも後から考えてみて思ったの。そんな偶然があるはずないって。もしあの女が私たちに気づいていたら、とくに告げ口に行ってるはずよ。今日だって私は出てこれたんだし！」彭年も、臆病だね、と笑い飛ばした。絶対そんなまずいこと、起こるはずないよ。

こうして二人が、臆病だなんだと話しているちょうどその時、ドアの把手が、かすかに回り、誰かが外から、こっそりと中に入ろうとしていた。二人はそのまま気がつかないでいたかも知れない、何の足音も聞こえなかったのだから。把手はもう何回も回されていたのかもしれない。梅が心配と言いつつ、見るともなく視線をドアに移した。彼女は錯覚かとも思った。が、すぐ

にとんと外から軽々たたく音がして、次にどんとどんと強々たたく音が聞こえた。二人は堅く手を握り締め、恐ろしさのあまりなすすべもなく顔を見合わせ、息さえじっとひそめる有様だった。部屋には小さなテーブル、小さな戸棚、小さな椅子、どこにも隠れる場所はない。あとは窓から飛び下りるしかない。しかし、二人がいるのは三階である。彭年は考えた。もし、外の人間がドアを破って入ってきたなら、飛びかかって喉を締めつけてやる——なんだかますます小説みたいになってきた感じがした。

ドアをノックしていた人間はしばらくすると立ち去った。彭年は吹き出しそうになったが、梅は駄目だというように手を振るとじっと耳をそばだてていた。足音が一段一段遠ざかっていくと、彼女はようやく安堵の吐息を洩らし、へなへなとベッドの縁に座りこんでしまった。彭年は笑って言った。「びくびくしてたら事はうまく運ばないよ。一刻も早く始めなくちゃ。」梅は首を左右に振って言う。本当に馬鹿な事をしたわ。錠をさしっぱなしにするなんて。中に人がいたってきつとわかってしまったわ。彭年は彼女の肩を抱いて笑った。そんなに心配して、ほとんどノイローゼだね。「ここは君の部屋じゃないんだぜ。彼女にだって友人が尋ねてくることもあるだろう？ 部屋で寝ていて、出たくないことだってあるだろ？」それでも、梅は不安がった。彭年はかまわず将来のこと、どのように手はずを整え、どこから始めようかと話した。ようやく梅も落ち着きを取り戻し、神経過敏だったと認めたのである。「どんなにあいつが怖い、あなたにはわからないのよ。」梅は正直に言った。

彭年は英雄気取りで胸をたたいした。「僕が守ってあげるのにまだ怖いのかい？」梅は感激して顔をあげた。彭年は彼女に語った。家には兄弟姉妹が大勢いるから、自分一人く

らいどうなろうと構わない。二人で小さな巣を作るんだ。一人が家を守り、一人が働きにでることにしよう。「ね、いいだろう？」彭年は親指を彼女の顎の笑くぼに当て顔を上向させた。「これからは、人に姓をきかれたら、葉と答えるんだよ。いいね？ オッケーなら笑ってごらん。」

梅は笑おうとしたが今にも泣きだしそうだった。口元がふるえ、やっとのことで涙を抑え、笑顔をつくった。彼女は言った。「あんまりうれしいもんだから。」

二人は二日後の手筈を決め、そのまま別れた。これからはいつも一緒にいられると信じて。しかし、彭年は二度と再び彼女に会うことはなかったのである。

駅のホームで一日待ったがとうとう梅は姿を見せなかった。彭年は無我夢中で梅の友人のもとを尋ねたが、彼女も、変だわね、梅が見つからないわ、と言う。彭年は、何か情報がつかめたら電話で知らせてくれるように頼んだ。知らせは何も届かない。もうどうにでもなれとばかり、莉莉を尋ねた。が、莉莉は引越していた。誰も梅の消息を知らなかった。

電話はいつも決まって令儀からだった。「彭年？ 忘れないでね、いつもの時間に……」

なお翻訳に際しては張愛玲は『伝奇増訂本』（一九四六年、上海、山河圖書公司刊、一九八五年、上海書店影印）、『流言』（一九八七年、上海書店影印）を、楊絳は初出をそれぞれ底本とした。

一九九二年十月十日

藤井省三

中国文学⑤

浪漫都市物語

上海・香港'40S

1991年12月1日初版発行

張愛玲・楊絳——著者

藤井省三——監修者

桜庭ゆみ子・上田志津子・清水賢一郎——訳者©1991

蓮見清一——発行者

JICC(ジック)出版局——発行所

東京都千代田区麹町5-5-5

郵便番号 102

郵便振替 東京7-170829(株)ジック

電話 編集部03・3234・3688 営業部03・3234・4621

信毎書籍印刷——印刷所

小泉製本——製本所

菊地信義——装幀者

乱丁・落丁本はご面倒ながら小社営業部宛ご送付下さい
送料・小社負担にてお取替いたします

ISBN 4-7966-0223-2

Printed in Japan.